



Title	新しい『英米研究』の発刊に寄せて：田尻先生を惜しむ
Author(s)	上田, 功
Citation	大阪大学英米研究. 2008, 32, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99318
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

新しい『英米研究』の発刊に寄せて

－田尻先生を惜しむ－

上田 功（外国語学部英語学科目専攻代表）

2007年10月に、大阪外国語大学は、大阪大学と統合し、新生大阪大学となりました。われわれ英語専攻には、これまでも大きな転換点がありました。戦後、新制大学としての出発もその一つでしょうし、90年代に全国的に吹き荒れた教養部改組の嵐の中で、英語学科を廃して、言語情報と中北欧、北米専攻に分かれ、Ⅰ部とⅡ部を廃止し、昼間主と夜間主に組織替えがなされたこともそうでしょうし、さらに法人化されて、国立大学ではなくなったことも、まぎれもなく大きなマイルストーンでありました。しかしながら今回の統合は、長年われわれと共にあった「大阪外国語大学」という名前が無くなり、大阪大学という大きな組織の一部に組み入れられたという点で、文字通り未曾有の出来事と言えましょう。われわれスタッフも、学部は外国語学部を担当しますが、所属はいくつかの研究科とセンターに分かれることになりました。

国立大学の法人化から今回の統合まで、逆らいようもない奔流の中で必死に泳いできた現在のスタッフにとっては、統合に至るプロセスを目の当たりにしてきたので、大阪外大という名前の消滅は、ある程度必然であると、冷静に受けとめることができますが、卒業生や旧教官・旧教員にとっては、さぞかしショックであろうと思います。これまで英語専攻は、各界に優秀な卒業生を送り出し、また大学院もさまざまな学会で活躍する人材を輩出し、特に言語学では、わが国の言語学を国際舞台へと牽引する研究者を多数育てて

きただけに、関係者にとって、母校の名前が消えるのは、まことに残念でありましょう。

このような統合の激変のなかで、またわれわれを悲劇が襲いました。長年、中北欧講座にあって、中世英語英文学を専攻してこられた、田尻雅士先生が2007年5月に急逝されたのです。46歳という若さでした。われわれは現役の同僚として、ほんの数年前に内田憲男先生を失ったばかりで、うち続く身を切られるような悲しい経験に、ただただうろたえ、たとえようなない喪失感に苛まれています。

田尻先生は、大阪外国語大学英語学科・同大学院英語学専攻のご出身で、修士課程修了と同時に、国立海技大学校の助手に採用され、その後母校大阪外大に転任され、以来、ご専門の中期英語を文献学のご研究され、それをゼミや大学院で、学生にも教授なされ、後進の指導にあたってこられました。また英語講読や英作文など、実習の授業も古き良きスタイルを踏襲なされ、またご自身も英語を愛し、ご研鑽を忘れず、まさしく外語の伝統を体現した方でした。また先生は英語専攻内外の委員として、たとえ嫌な仕事であっても決して手を抜かず、本当に誠実にさまざまな問題にあたられました。しかし何より先生の存在感を感じさせたのは、研究面でありましょう。先生はわが国有数の中世英語英文学研究者として、若手の時代からずっとご活躍を続けてこられ、大阪大学に提出して博士号を取得された学位論文は、海外の専門誌でも書評されるほどでした。研究者として、まさに油の乗りきった時期での逝去は、われわれのみならず、大阪大学全体、そして中世英語英文学会全体にとって大きな損失となってしまいました。

新体制の元で、英語専攻は、大阪大学外国語学部英語専攻となりました。これまでのように、3つの専攻に分かれていた時代より、すっきりとして、外部にははっきりと、英語の教育と研究をする専攻であると一見してわかってもらえます。しかしながらわれわれはまだ新しいスタートラインから、満身創痍の状態で走り出したばかりで、本当の勝負はこれからです。まず教育

面では、これまで以上に学生に対して、良い英語教育、日本で最高の英語教育をおこない、優秀な人材を社会に送り出し、外大英語専攻の遺伝子を伝えていかねばなりません。また研究面では、スタッフが各自の専門領域で、はっきりと学会や社会に認知される成果を、継続してあげてゆかねばなりません。このように教育と研究両面で、対社会的に重い責任を果たしていかなければならない時だからこそ、田尻先生の実在の大きさを痛感するのです。

田尻先生は、この『英米研究』を非常に大切にされ、ほとんど毎号に寄稿されていました。「本誌は、英語の教員が自発的に作った研究発表の場なので、おろそかにすることは、自己を否定することになる」と言っておられたのが、まだ私の耳に残っています。確かに昨今、学会誌等を含め、われわれには多くの研究発表の場がありますが、この『英米研究』は、われわれの研究者としての原点と言えるかもしれません。統合に係わる膨大な仕事ゆえに、本号には、私を含め、必ずしも全員が寄稿することができませんでしたが、この機会にこれまでの自分の研究を振り返り、今後自分がなすべきことを考えたいと思います。そして残念ながら、若くして、前途洋々たる研究生活に終止符を打たねばならなかった田尻先生の分まで頑張ろうとの決意を新たにしたいと思います。

この新生大阪大学になって初めての『英米研究』第32号を、謹んで田尻雅士先生の霊前に捧げます。

2008年2月